

# キリトとイチカとオリ主のIS物語

さかき しゅう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

黒の剣士 キリト

ソロ

血盟騎士団副団長

閃光のアスナ

イチカ

ソロ

火の虎

ハク

血盟騎士団副団長

無限槍のカタナ

血盟騎士団1番隊隊長

赤眼の死神

ハク

血盟騎士団1番隊副隊長

フェアリー セシル

彼らはSAOの中で知り合い絆を深めながらクリアに導いた。

そして、新たな事件に巻き込まれる。

それは、ISを動かしてしまうこと

オープニング

目

次

I S 学園入学編

1  
3  
話  
1  
2  
話  
1  
1  
話  
1  
0  
話

42 39 36 31 27 23 20 17 15 12 9 6 1

オープニング

1  
話

12時57分 カチツカチツカチツカチツカチツ  
キリトキリト（もうすぐ1時か）

（またの世界に行くんだな）

一〇七

イチカ（もう1時だ）

「東さん行けます」

史記卷之三

楯無「先に行つてくるね」  
簪「うんいつてらつしやいお姉ちゃん」

ハク「セシリ亞もうすぐ日本時間の1時だよ」

セシリア「そうですわね」

ハタチ久しぶりの休みだからお獎り

卷之三

カチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツ  
1時

「リンクスタート」

時は流れく

## アインクラッド第75層フロアボス戦

それは最悪の出来事だつた。

キリト「14人死んだ」

エギル「嘘だろ」

周り「えつ！…」

クライン「あと25層もあるんだぜ」

エギル「本当に俺たちはてっぺんまでたどり着けるのか」

イチカ「くそ」

ハク「何人死ねば気が済むんだよ

茅場晶彦」

その中で平然と立っている男

キリト「はつ…」

アスナ「キリトくん？」

その時キリトは驚くべき行動に出た

立ち上がり攻略組を率いている血盟騎士団の團長ヒースクリフに  
対してソードスキル発動させた。

その行動に誰もが驚いていた。

アスナ「キリトくん何を…えつ」

アスナ「システム的不死…つてどういうことですか團長」

イチカ「まさか」

ハク「そのまさかつてことだろうな」

キリト「この男のHPゲージはどうあろうとイエローまで落ちない  
ようにシステムに保護されているのさ」

周り「えつ」

キリト「この世界に来てからずっと疑問に思っていたことがあつ  
た…………あいつはどこで観察しこの世界を調整しているのだ  
ろうと。」

「でも俺は単純な心理を忘れていたよどんな子供でも知つてている事長  
谷のやつてるRPGを傍から眺めるほどつまらないものはない。」

「そうだろヒースクリフいや茅場晶彦」

周り「えつ」

カタナ「うそでしょ。團長が茅場晶彦？」

ヒースクリフ「なぜ気づいたか参考までに教えてもらおうか？」

キリト「最初におかしいと思ったのはデュエルんだ。最後の一瞬、  
あなたはあまりにも速すぎたよ。」

ヒースクリフ「やはりか。あれは私にとつても痛恨時だつたよ。ついシステムのオーバーアシストを使つてしまつた。それに最後は警告されましたからねハク君とセシル君に。まあその時は警告だけでごまかせましたかね。」

キリト・イチカ・アスナ・カタナ「気づいていたの「か」？」

セシル「ええ。証拠はなかつたですがね。」

ヒースクリフ「確かに私が茅場晶彦だ。付け加えれば最上階で君たちを待つはずだつたこのゲームの最終ボスだ。」

周り「ええっ」

攻略組に激震が走つた

キリト「趣味が良いとは言えないぞ！最強のプレイヤーが一転最悪のラスボスか。」

ヒースクリフ「なかなかいいシナリオだろ。最終的に僕の前に立つのは、君たちだと思っていたよ。キリト君・アスナ君・イチカ君・カタナ君・ハク君・セシル君。」

最初にユニークスキルを君たちにあげたのはそのためだよ。」

血盟騎士団メンバー「俺たちの忠誠・希望をよくも・：よくも裏切つてくれたな」

メンバーの人気がヒースクリフに切りかかる  
しかしキリト以外の全員に麻痺をつける

アスナ「キリト君」

キリト「どうするつもりだ。ここで全員を殺して隠蔽する気か？」

ヒースクリフ「まさか。そんな理不尽な真似はしないさ。こうなつては仕方ない私は大百層の紅玉宮にて君たちを待つことにしよう。その前にキリト君、君には私の正体を見上げた報酬を与えたねばな。チャンスをあげよう。」

キリト「チャンス？」

ヒースクリフ「今この場で私と1対1で戦うチャンスだ。また勝てばこのゲームをクリアされる。どうかな？」

アスナ「だめよキリト君今は、今は引いて」

キリト「ふざけるな！」

いいだろう。決着をつけてやる。」

アスナ「キリト君！」

キリト「ゴメンナここで逃げるわけにはいかないんだ」

アスナ「死ぬつもりじゃないんだよね？」

キリト「ああ。必ず勝つ！そしてこの世界を終わらせる」

アスナ「わかった。信じてるよキリト君」

クライン「キリト～」

キリト「エギル、今まで剣士クラスのサポートサンキューな。知つてたぜお前が儲けのほとんどを中層域のプレイヤーの育成につぎ込んでいたこと。」

エギル「あつ～」

キリト「クライン、あの時お前を連れて行けなかつたことをずつと後悔してた。置いておいて悪かつた。」

クライン「キリト、今謝つてんじやねえ。向こうで飯の1つや2つを奢らないと絶対許さないからな！」

キリト「わかつた。向こう側でな。」

キリト「イチカ、今までビーテー何かの俺を慕つてくれてありがとう」

イチカ「うつ～：絶対に勝つてくださいよ。キリトさん」

キリト「カタナ、こんなゲームの中でもお前の明るさが楽しかつた。いつまでもイチカと仲良くな。」

カタナ「絶対に、絶対に勝つて向こうで会いましょう。」

キリト「ハク、お前に教えられたことたくさんあつた。楽しかつたよ。ありがとう。」

ハク「キリトさんこそ俺にたくさんのこと教えてくれたじやないですか。絶対に勝つてください。」

キリト「セシル、いつも後からの援護ありがとう。お前の弓が示したボスの弱点、何回も救われた。ハクと仲良くな。」

セシル「アスナさんを置いていかないでくださいよ。絶対に勝つてください。」

キリト「悪いが 1つだけ頼みがある」

ヒースクリフ「何かな」

キリト「簡単に負けるつもりはないが、もし俺が死んだらしばらくで良いアスナが自殺しないように取り計らってくれ」

ヒースクリフ「ほう⋮⋮ よからう。」

アスナ「だめだよキリトくん⋮⋮ そんなの、そんなのないよ」

そんなアスナの願いが届かず、2人の強者による命をかけた殺し合いが始まる

キリト「でえやあああ!!!」

キリトのその言葉を会図に繰り出す一刀流の剣。

しかしユニークスキルを持つヒースクリフも圧倒的防御力で攻撃を止めていく。イライラが爆発したキリトは冷静さを失いソードスキルを発動させてしまいそれを全て盾で受け止めたヒースクリフそしてキリトに長い硬直が⋮⋮

ヒースクリフ「さらばだキリト君！」

アスナ「キリト君」

イチカ・カタナ・ハク・セシル「キリトさん」

クライン・エギル

「キリト⋮⋮」

それぞれがキリトの名前を叫ぶ。

しかし、キリトに剣が当たる事はなかつた。

キリト「えつ⋮⋮ アスナ？ 嘘だ⋮⋮ こんなの⋮⋮」

アスナ「ごめんねキリト君」

最後の言葉を残して、光の粒子となつてアスナさんが消えていつた。

## 2話

それを拾い集めルカのように光の粒子を追う  
しかしその粒子は消えていった

キリトは力なく剣を振るうがその剣をヒースクリフが弾き飛ばし  
力なきキリトに剣を突き刺した

誰もが終わつたと思つた

その時だつた

キリト「……くつ、まだだ！」

体が粒子になりかけていて今にも消えそうだつたキリトがヒース  
クリフの体をアスナの愛剣のレイピアでヒースクリフの体を突き刺  
した

キリト「これでいいかい？」

そう言うとキリトもヒースクリフと一緒に消えていった。

カタナ「ねえ、最後にあなたの名前教えてくれない？」

イチカ「天道一夏　　年は今　15歳かな」

カタナ「私は更式刀奈　　歳はあなたより1つ上の16歳だよ」

そしてリアルの名前も教えあつてまた会いに行くと約束して現実  
に戻つていった

場所は変わつて

そしてここはキリトとアスナのいる場所

キリト「ここは？」

アスナ「キリト君」

キリト「ごめん、俺も死んじゃつたよ」

アスナ「バカ」

アスナは走つて近づいてきてキリトにキスをする

キリト「ここはどこだろう。」

アスナ「ねえ、あれ。」

それは俺たちが　　2年半戦つてきたアインクラッドが壊れて

言っている瞬間だった

茅場晶彦「なかなかに絶景だな。」

キリト・アスナ「えつ？」

キリト「茅場晶彦？」

茅場晶彦「現在アーガス本社に設置されたSAOのメインフレームのデータの完全消去を行つてている。」

「あと10分ほどでこの世界の何もかもが崩壊するだろう。」

アスナ「あそこにいた人たちはどうなったの？」

茅場晶彦「心配には及ばない、先ほど生き残った全プレイヤー6,1

47人のログアウトが完了した

キリト「今までに死んだ人は、今までに死んだ4,000人は、どうなったんだ？」

茅場晶彦「彼らの意識は帰つてこない。」

も一緒にさ。」

キリト「なんで、なんでこんなことしたんだ。」

茅場晶彦「なぜ？か。私も長い間忘れていたよ。なぜだろうな。」

「私は長い間あの城作るために生きてきた。空に浮かぶ鋼鉄の城に憧れたのは何歳の時だったかな。」

「だが、いいものが見られた。私のシステムですら超越する力を。」

「私はね、キリト君まだ信じているのだよ。どこか別の世界にはあの城が存在すると。」

キリト「ああ、そうだといいな。」

茅場晶彦「そうだ。言い忘れていたよ、ゲームクリアおめでとうキリトくん、アスナくん

さて、私はそろそろ行くよ。」

茅場晶彦は風とともに消えていった。

キリト「お別れだな」

アスナ「うんうん、お別れじゃないよ私たち1つになつて消えて  
いくだからいつまでもいつしょ、ねえ最後に名前を教えて?キリト君  
の本当の名前。」

キリト「桐ヶ谷和人、たぶん先月で16歳。」

アスナ「桐ヶ谷 和人くん: 年下だったのか?」

キリト「結城 明日奈 ごめん 私はね結城明日奈 17歳です」

キリト「結城 明日奈 ごめん 束したのに…俺は…俺は」

アスナ「うんうん、いいの、いいんだよ私幸せだった和人君と会  
えて、一緒に暮らせて今まで生きてきて1番幸せだったよ、ありがと  
う、愛しています」

その後2人を光が包み込み

現実世界へ帰還した

### 3話

S A O から帰ってきて数ヶ月がたとうとしていた。

そして帰ってきてから俺たちに待っていたのは、リハビリの日々だつた。

2年間も体が寝たきりの状態になつていたので当たり前と言えば当たり前である。

しかし僕たちはまた新たな事件に巻き込まれてしまつた。帰還したはずのS A O 生還者のうち、300人が現実世界に意識が戻つてこないと言う事件であつた。その300人の中にはキリトの恋人であるアスナも含まれていた。

何の手がかりもないままエギルの店に来ていた。

しかしそこで思いもよらない手がかりがあつた。

それは、アルヴヘイム オンライン

通称A L O

そのゲームの世界樹の1番上の鳥籠にアスナによく似た人物が写つていたのだ。

ハクとセ希尔はイギリスに住んでいたらしく連絡が取れなかつた。そのため、キリトとイチカとカタナの 3人でA L Oに行くことになつた。

それぞれ選んだ種族は

キリトはスプリガン

イチカはサラマンダー

カタナはウンディーネ

だつた。

途中、シルフ族のリーファの案内があり無事に世界樹の下えとたどりついた。

グランドクエストでは、シルフやケットシーの協力でクリアをすることに成功した。

そしてその後、キリトの手によつて、首謀者である須郷は逮捕され、

無事にアスナや他の300人のプレイヤーは現実世界へと復帰が叶つた。

そして、ALO事件から1ヶ月、  
俺たちは、4人で空港へと来ていた。

アスナ「あつ、おーいキリトくん、こつちこつち。」  
キリト「ごめん、まつた?」

アスナ「うんうん、今来たとこ。」

カタナ「久しぶり、キリトくん、アスナちゃん」

イチカ「お久しぶりです。キリトさん、アスナさん。」

アスナ「あつ、カタナちゃんにイチカくん久しぶりだね」

キリト「ALO事件の事情聴取の時以来だつたね、たしか。」

イチカ「はい、その時以来ですね。」

カタナ「まさかハクくんもイギリスに住んでるなんてね。」

アスナ「そうだね、セシルちゃんは顔立ちが外国人みたいだつたし  
気づいてたけどまさかハクくんもだなんてね」

ピンポンパンポン 東京発イギリス行きはまもなく搭乗開始します。

アスナ「あつ、もう搭乗時間だ」

カタナ「じやあつ、もういこつか?」

キリト・アスナ・イチカ「そうだな(ね)」

カタナ「ん、やつと着いた」

アスナ「ほんと、周りは全部英語ね!」

キリト「俺、イギリスに来るの初めてなんだよな。イチカ、お前は

?」

イチカ「そうですね。僕は何度か來たことがあります」

キリト「えつ、うそ」

「アスナやカタナは？」

アスナ 「私はいちどだけ。」

カタナ 「私も何度か。」

キリト 「うそ、俺だけ初めて？」

雑談をしながら空港のエスカレーターを上つていく

イチカ 「ねえ、アスナさん。」

アスナ 「ん、なに？」

イチカ 「ハクやセシルは、どこにいるんですか？」

アスナ 「確かに、空港の前で待つてるって言つてた」

そして空港から出てきたらいギリスのロンドンの街並みが広がつ

ていた。

キリト・アスナ・イチカ・カタナ 「「「お~」」」

ハク 「やあ、みんな久しぶり、長旅ご苦労様でした。」

セシル 「よく、皆さんイギリスまでお越しくださりありがとうございます。」

います

お久しぶりですわ。」

キリト・アスナ・イチカ・カタナ 「「「ハク、セシル久しぶり！」」」

アスナ「今日はお招きありがとうございます。ハクくん、セシルちゃん。」  
ハク「いえいえ、こっちでもたくさん遊んでいてくださいね。」  
キリト「なあ、ハク？」

ハク「はい、なんですかキリトさん？」

キリト「ロンドンで1番楽しいところってどこだ？」

ハク「うん、そうですね、ロンドンもいろいろありますからね。例  
えばどんな所ですか？」

イチカ「そこはやつぱりビック・ベンでしょー。」

カタナ「うん、私もそこが1番かしら。」

ハク「えっ、僕はロンドン・アイですかね。あそこから見るロンド  
ンの景色は最高ですからね。」

アスナ「ねえ、ちょっとみんなここに来た目的忘れてない！」

キリト・イチカ・カタナ・ハク

「「「あははは」」

セシル「あつ、ちょうどお迎えの車が来ましたわよ。」

カタナ「すつすごい、これがハクくんとセシルちゃんの家。」  
キリト「さすがＩＳシェア第二位の会社だな。」

???「よ、遅かつたじやねーかキリトよ。」

キリト「おつお前は、クライン？」

クライン「おいおい、忘れちまつたのか？」

アスナ・イチカ・カタナ「「ク、クライン（サン）」」

クライン「おう、お前らも久しぶりだな！」

キリト「でもなんでお前がここにいるんだ？」

クライン「俺だけじゃねえぜ。」

エギル「よお、キリトにアスナそれにイチカにカタナ。」

キリト・アスナ・イチカ・カタナ「「エギル（さん）まで？」

リズ「遅いわよあんたたち！」

アスナ「えつ、リズ？」

シリカ「ちょっと待ってくださいよー、リズさん。」

キリト「えつ、シリカ？」

シリカ「えつ、ああ皆さん久しぶりです。」

カタナ「でもなんでみんなここに？」

リズ「まあそれは中に入つてのお楽しみと言うことで！」

そしてオルコット邸に入ると

パンツ パンツ パン

みんな「キリト、SAOクリアおめでとう。」

みんな「イエーイ！」

キリト「アスナも知つてたのか？」

アスナ「このパーティーに関しては何も知らないよ。」

リズ「本当は最初、エギルの店でやろうとしてたんだけどね。たまたまセシルから電話かかってきてー、

ギリスの私の家でやる? って言われて、イギリスだから旅

費の事とかもあるしお断りしたら、お金とかこつちに任せてくれといつて言われてお願いしちゃつたわけ！」

カタナ「すごいね」

そしてSAO帰還者のみんなで楽しい時間を過ごした。

そして、翌朝

イチカ「えつ、クラインさん達つてもう帰っちゃうんですか？」

クライン「ああ、もともと滞在時間は今日までだつたしな。次は日本で会おうぜ。」

キリト「ああ、そうだな。」

日本に帰る組「じゃあまた今度、次は日本で。ハクやセシルも日本に来た時は家によつてね」

残る組「じゃあまた今度、バイバイ。」

残った組「ふう、行つちやつたね。」

カタナ「ところで今日の予定は？」

ハク「ああ、俺たちの会社に来てもらう。キリトさんやイチカもI Sに興味あるつて言つてたでしょ？」

キリト「やつたなー、イチカ！」

イチカ「はい、そうですね。」

アスナ「でも、大丈夫なの？」

セシル「何がですか？」

アスナ「だつて今は、女尊男卑つて言う社会だし、日本も今この風潮だし……」

ハク「ああ、そのことは大丈夫だよ。イギリスには女尊男卑の風潮は、ほぼ消したんだから。」

カタナ「えつ、すごいねそれ。」

キリト「まあ、俺たちには、動かせないんだし大丈夫だよ。」

## 5話

キリト「ここがＩＳ研究施設！」

イチカ「ハク、これ触つてもいいんだよな？」

ハク「ええ、もちろん！」

そして、キリトとイチカは、オルコット社が開発した　ティアーズという量産型の第3世代機にそれぞれ2人が触れてみる。すると、異変が起こった。

キリトとイチカは変な感覚に襲われていた。ＩＳに触れた瞬間、頭の中にものすごい情報量が入ってきた。

アスナやカタナ、ハクやセシルがものすごく驚いた顔をしていた。

ハク「そ、そんなばかな？」

アスナ・カタナ「う、うそ。」

セシル「それよりも、ハク、このことがばれてしまったら、何の後ろ盾もないキリトさんやイチカさんは、

モットにされてしまいますわよ。」

キリト「モ、モルモット!!?」

セシル「ええ、ハクさんは、イギリス国籍を持つているため、イギリスで守ることができますが…」

イチカ「えつ、ちょっと待て。ハクもＩＳに乗れるのか？」

ハク「あれ、言つてなかつたつけ？」

キリト・アスナ・イチカ・カタナ「聞いてないよ!!!」

ハク「うーん、しかたない。　1回このことは伏せて、先に2人にはイギリス国籍を取つてもらう。」

セシル「なるほど、その手がありましたね。」

アスナ「じゃあ、私もイギリス国籍を取つていい？」

ハク「ああ。」

そして、一旦キリト達は、日本に帰つていった。

ハク「まさか、キリトさんやイチカさんもＩＳを起動させてしまう

とは。」

セシル「そうだな。」

ピーンボーン

ハク「こんな夜中に誰だ?」

??「おーい、ハツくん、セーちゃん!」

ハク「えつ、東さん?」

東「うんうん、2人とも元気にしてた?」

ハク・セシル「はい」

ハク「でもなんで東さんがここに?」

東「イヤー、今日誰か、男の子が2人ISを起動させなかつた?」

ハク「やつぱりわかつて いましたか。実は今日は、SAO時代の友人が来てましたね、その人が起動させたんで

す。」

東「じゃあ早速その2人に合わせてくれるかな?」

ハク「いえ、実はですね」

話の中

東「なるほど、いつくんとキーくんがたんだ!!?」

ハク「えつ、キリトさんとイチカさんと知り合いなんですか?」

東「うん、いつくんとは一緒に住んでいて親がわりだし、いつくんが連れてきた友達がキーくんだったんだよ。」

ハク・セシル「えつ、えー。」

東「でも確かにイギリス国籍を探らせておいた方が多分いいかな。」「じゃあ、東さんもおうちにかかるね。」

ハク「わかりました。」

東「あつ、そういうえばこのことを話さなくちゃいけなかつたんだ。」「このことはもうキーくん達は知つてるから。」

そして一夏の過去があかされる。

## 6話

そうして、東は一夏の過去について話し始めた。

時はさか上ること、5年前

ここは、ドイツの町外れにある周りが森に囲まれて廃工場のある一室。

一夏「ぐはっ…」

この部屋にいるのは、体を縛られている1人の小学生位の男の子と、拳銃を持つていて4人の男と、ブレスレット着けている1人の女がいた。

その男の子は、今絶望のような顔していた。理由は、簡単である。

一夏「なんで…信じたのに…千冬姉」

男「くそつ、作戦失敗だ！」

男2「織斑千冬は、家族を1番に大事にしてるんじゃなかつたのか？」

10分ほど前

女「だから、織斑千冬の弟の織斑一夏の方を誘拐したと言っているだろう!!？」

日本政府「織斑千冬さんに確認したところ春秋以外に弟はない」といつていままでので、切らせていただきます。

そう、男の子は姉の裏切りで絶望していたのだ。

男達は、目的が失敗したため、その男の子に暴力をふるつていたのだ。

男の子は、ボロボロだった。

男の子は姉、千冬に褒めてもらうためにたくさんのこと努力して頑張っていた。

だが、兄・春秋に勝つたとしても、

千冬「春秋が、お前に負けるはずない。なにか、いかさまでもしたんだろう。」

春秋「うわー、このイカサマ野郎！死ね！」

一夏「違うよ、そんなことしてないよ。大体、僕の方が頭いいんだから！」

千冬「はあー、まだ白を切るつもりか？なら私にも考えがある。」  
そういうと竹刀を持ち出し殴った。

一夏「うわーん。痛いよー。」

すると春秋も竹刀で殴り始めた。

たまたまだつた。そこにまだ小さい頃の束が通り掛かつたのは。  
束「ちょっと、いつくんに何やつてるの？」

千冬「こいつが、テストでイカサマをしたから、教育してるんだ！」

束「ふざけないで、いつくん、立てる？」

一夏「う、うん。」

束「手当てをするから束さんのお部屋に来て。」

一夏「わ、わかった」

千冬「おい、どこに連れて行こうとしている？まだ教育は、終わつてないんだぞ。」

それから一夏は、テストなどでは、常に春秋に負けるようにしていた。

しかし、たまに束さんのところに来ては、勉強を教わっていた。

束「あれ？今日は、いつくん、くるの遅いな？」

束は、外に出て道場のほうに向かつて歩いてみる。

笄「だから、さつさと立て！」

束「ちよつと笄ちゃん、何やつてるの？」

笄「姉さん、こいつが春秋に 50メートル走で勝つたんだ。出来

損ないの一夏が春秋に勝てるわけがない。

だからイカサマを暴こうとしているんだ！」

束「は？ほら、いつくん立てる？」

一夏「あ、ありがとう束さん」

束「うん、それじゃあ私の部屋に行くよ。」

笄「おい、一夏まだ終わつてないぞ！」

束達は、無視して、道場から出て行く。

だけど、東さんがＩＳを発表してからは、また変わつてしまつた。  
学校でのいじめは激しさを増していくつた。

場所はまた廃工場にもどり

男「こいつどうする？」

女「もう、要はないわ殺しちやつて。」

男2「何か、いい残す事は？」

一夏「じゃあ織斑千冬に死ねとでも伝えてください。」

男2「了解」

男3「じゃあ死ね。」

そして、腹などに銃が撃たれた。

男4「じゃあな、坊主。」

男4人と女はここから去つていつた。

だがまだその男の子は、死んではいなかつた。しかし、出血多量で  
もう死にそうな状態ではあつた。

その時

???「いつくん、しつかりして。」

そこで一夏は氣を失つた。

一夏「ん…ここは？」

束「いつくん？」

一夏「えつ？束さん？」

束「よかつたー。もう10日間も寝たきりだつたんだよ。」

一夏「え？ 10日も、あれつていうか俺生きてる!?」

束「うん、後5分遅かつたら死んでたかもしれないんだからね。」

一夏「えつ、じゃあ束さんが僕を助けてくれたんですか？」

束「当たり前だよ！」

一夏「あつありがとうございます。」

そう言つて一夏は、たまつていたものを吐き出すように泣き始めた。

束「うん、大丈夫だよ。そうだ、ここで一緒に暮らそうか。」

一夏「えつ？いいんですか？」

束「もちのろんだよ！束さん家事あまりできないし。」

一夏「わかりました。家事は、僕に任せてくれださい。」

束「うんうん、よろしくね、いつくん。」

一夏「はい、よろしくお願ひします。」

そうして、束は一旦自分の研究室へ戻つていった。

一夏「よし。新聞でも読みますか。」

（織斑千冬 2連覇達成）

一夏「やっぱり勝っていたのか…」

それから2週間後

束「おーい、いつくん。」

一夏「どうしたんですか？」

束「やだなあ、束姉つて呼んでよ！」

一夏「へつ？」

束「実はですね、戸籍を変えてみました。」

一夏「えつ？」

束「そして紹介したい子がいます。」

??? 「はじめまして、いつくん様。私の名前は、クロエ・クロニク

ルといいます。よろしくお願ひします」

一夏「よ、よろしく。あれっていうかいつくん様？」

束「うん、そうだよ。これからは、3人家族だよ。」

一夏「ふふ、家族か。」

束「えつ？ 何か言つた？」

一夏「いいえ、嬉しいだけです。」

クロエ「いつ、いつくん様泣かないでください。」オロオロ

束「あつそだ、名字何がいい？」

一夏「じゃあ、天道 でお願ひします。」

束「なんで、天道なのかな？」

一夏「天の道のように、家族3人で良い関係になりましょう」と言  
うことで。」

束「ふふつ、いつくんらしいね。それじゃあ今から私たちは、

天道 一夏 束  
と

天道 一夏  
と  
クロエ

ということで。」

束「これが、いつくんの過去だよ。」

ハク「そうですか。」

セシル「お辛かつたでしょうね。」

ハク「じゃあ、僕も話さなければならぬですね。」

束「はつくん？」

ハク「束さんが気づいている通り、僕はオルコット家の<sup>人間</sup>ではありません。」

束「それは、なんとなくわかつてたけど……」

ハク「セシルに出会う前の事はなんも覚えてないんですよ。」

束「そうなんだ。」

ハク「イチカさんやキリトさんにも伝えておいてください。」

束「わかったよ。」

ハク「ありがとうございます。」

束「じゃあ今日はもう帰るね。」

ハク「はい、わかりました。」

セシル「またいつでも寄つてください。」

束「うん、ありがと。夜分遅くに失礼しました。」

そして後日、キリトさんとアスナさんとイチカさんがイギリス国籍を取得した。

## 8話

テレビ

女キヤスター「緊急速報です。本日、イギリスの女王陛下の会見で、桐ヶ谷和人さん、天道一夏さん、

ハク・オル

コットさんが、新たに男性操縦者として、見つかりました。彼らは、日本人ですが

イギリス国

籍を取得しており、イギリスで、保護されることとなっています。

また、ハク・

オルコットさんは、オルコット社の副社長ですが、副社長をしながら、テストパ

イロット

となり、桐ヶ谷和人さんと天道一夏さんもオルコット社のテストパイロットとして、

来年から、先

に見つかった初代ブリュンヒルデ織斑千冬さんの弟の織斑春秋くんと同様に、

I S 学園へ

の入学が決まりました。これで男の I S 操縦者は4人となりまだ他にもいないか政府は、

調査する予

定です。これで緊急速報を終わります。」

これより1週間前

テレビ

女キヤスター「き、緊急速報です！ 男性の I S 操縦者が現れました！ その男性は、織斑春秋くんです。」

まもなく記

者会見が始まります。」

記者会見会場

千冬「春秋をモルモットにしようとする輩がいれば排除する！」

春秋「えつと、事故で動かしてしまったとは言えIS使えるのは誇りに思っています。

シャー。」

(IS学園って女子校なんだよな、ヨツ

女キヤスター「これが、記者会見の内容です。」

東宅

一夏「束姉さん。こ、これ！」

束「ん、どうしたのいつくん？」

一夏「い、いや今春秋のやつがISを動かしたって!?？」

束「えつ？うそ!?？」

プルプルプルプル、プルプルプルプル

束「もしもし、はつくん？」

ハク「束さん、テレビ見ました？」

束「うん、凄いことになってるね!?？」

ハク「すいません、セシルと電話変わります。」

束「わ、わかった。」

セシル「お電話変わりましたわ。実は提案なんですが…」

束「提案？」

セシル「はい、実は、この機会にイギリスのソフィア女王を通じて、大宮から発表したはいかがですか？」

束「そんなことできるんですか？」

セシル「はい、じつは、ソフィア女王とは幼なじみのような関係で。ハクのことも知っていますし。」

束「わかつたよ！いつくんとキーくんには、私から伝えておくね。」

セシル「そして、もう一つお願ひが。」

束「なんですか？」

セシル「一夏さんに代わつてもらえませんか？」

束「うん、わかったー。」

一夏「はい、お電話変わりました。どうしたんですか？」

セシル「いえ、和人さんと明日奈さんと一夏さんに企業代表になつて欲しいんですが。」

一夏「僕たちがですか？」

セシル「はい。」

一夏「ちょっと待つてて。」

それから5分後

一夏「うん。その話、受けさせてもらうよ！キリトさんもアスナさんもOKだつてさ。それと…」

束「ねえねえセシルちゃん。」

セシル「はい？」

束「私もオルコット社で雇つてもらえませんか？」

セシル「わかりました、束さんには色々とお世話になつてますから。」

束「ありがとうございます。」

ハク「それとですね。このことを発表したらIS学園に入学しなきゃいけないと思う。」

専用機を作るのとか、いろいろあるので発表したらそのままイギリスの僕たちの家に合宿と言う形で

住み込んでもらつてもいいですか？」

一夏「ハクが言うんだつたらわかつた。」

束「そのIS、4人分作るのに私も協力してもいいですか？」

ハク「はい、そつちの方がやりやすいです。こちらこそよろしくお願いします。」

セシル「では、明日の分のイギリスへの飛行機チケットお送りしましたので。」

束「わかりました。開発とかはそつちに着いた後でやりましょう。」

ハク「わかりました。」

セシル「和人さんと明日奈さんに伝えておいてください。」

一夏「わかつてます。」

ハク・セシル「じゃー、また。」

東・一夏「うん、じゃあねー。」

クロエ「さよなら」

そして、冒頭へと戻る。

## イギリスの空港

キリト「ん~、やつと着いた。 2回目のイギリスもいいね！」

アスナ「ちょうど、キリトくん遊びにきたんじゃないんだからね！」

キリト「わ、わかつてるよ！」

イチカ「まあまあ、2人とも。」

キリト・アスナ「イチカ（さん）は黙つてて！」

イチカ「は、はい。」

そして、10分後

キリト「いやーごめんね、イチカ。」

アスナ「大人気無いところ見せちゃったわね。ごめんね。」

イチカ「いえいえ、もうすぐ着くつて電話がありましたよ。ハクから。」

そう話していると1台の車が3人の目の前で止まつた。

ハク「久しぶり3人とも。」

セシル「お久しぶりですわね！」

アスナ「こ、このくるまつてセシルちゃんたちの家のものなの？」

セシル「ええ！ そうでしたよ。」

キリト「す、すごいな。」

イチカ「ダメですよキリトさん、IS企業ナンバーワンの製造会社なんですから」

キリト「そ、そうだつたな！」

ハク「じやあ高速車に乗つて下さい。」

キリト・アスナ・イチカ「「「はい！」」

車の中

ハク「じゃあ3ヶ月ですけどがんばりましょう。」

キリト「そうだな。」

イチカ「はい。」

アスナ「頑張ろうね。」

セシル「もうすぐ会社に着きます。」

会社前

キリト「イヤー、何度来てみてもやつぱり大きな！」

イチカ「さすがですねえ！」

アスナ「てゆうか、まだ2回しか来たことないでしょ！」

イチカ「た、たしかに。」

セシル「じやあ入りましょうか。」

キリト・アスナ・イチカ「お、お邪魔します。」

研究所

ピピピピ ピピピピ

???「もうすぐくるかなあ？」

扉が開き5人が入つてくる。

ハク「東さん、今帰りました。」

東「うんうん、おかえりはつくん、セシルちゃん。そして、いらっしゃい、キーくん・あーちゃん・いつくん

オルコット社の開発部長の篠ノ之東さんだよ。」

クロエ「お久しぶりです。いつくん様。」

イチカ「えつ！ 東さん？ クロエ？ なんでここにいるんだ？」

東「イヤー、はつくんたちにIS委員会から逃げるの疲れたなら家で働けばって言つてくれたから。それに

いつくんは1ヶ月、キーくんとあーちゃんとかたちちゃんとISのお勉強でしょう。」

イチカ「ま、まさかハクたちのところに来てたなんて！」

ハク「ま、だから1カ月前から6人のISと一緒に作つていてんだ。」

アスナ「えつ、6人？」

ハク「ああ、俺たち4人プラスのセシルとカタナさんだよ。」

アスナ「あれ？ セシルちゃんは代表候補生で、カタナちゃんは、國家代表なんだよね？」

ハク「流石だな、アスナさん。でもイギリスの代表候補生と国家代表のISは、うちで作るようになつてるし、

カタナさんは、ロシアの国家代表だけどイギリスはロシアと技術連携しているから、ロシア政府に頼んで、カタナさんのISもうちで作るようにしたんだ。

イチカ「えつ？でも、この合宿には来てないだろ？」

ハク「ああ、だから途中参加だ。最初はロシアでも合宿があるらしいから1ヶ月後に合流だ。」

束「じゃーそろそろ本題に入ろうか。」

ハク「ああ、そうですね。」

束「まずは、機体から。キーキーくんのは、ブラックエンペラー。SAOのナーブギアからの情報を抜き取った。」

だから、SAO時代の最後と同じステータス。次にあーちゃんのは、レッドエンペラー。あとは、キーキーくんと同じだよ。次にいつくんのは、ホワイトエンペラー。あとおなじね。」

キリト「えつ、じゃあハクやセシルの機体は？」

ハク「僕の機体は、パープルエンペラー。あとは、みんなと同じだよ。」

セシル「わたくしの機体は、ブルーエンペラー。射撃が得意なので、SAO時代の弓ではなくて、BIT兵器を

乗せていますが、SAO時代の短剣はあります。」

束「あつ、そうそう君達6人のISは、第4世代型のISだよ。」

キリト・アスナ・イチカ「〔だ、第4世代？〕」

ハク「ええ、2人で作りました。」

セシル「じゃあ、訓練を始めましょうか！」

キリト・アスナ・イチカ「は、はい。」

そして1ヶ月後

カタナ「みんな、久しぶり。」

カタナさんがイギリスにやつてきた。

研究所

束「あつ、かたちやんいらっしゃい。」

カタナ「た、束さん？」

束「そつ、この会社に入社したの！」

カタナ「えつ、ええー！」

束「じゃあ、かたちやんの機体について、説明するね。かたちやんの機体は、ウォーターブルーエンペラー。ロシアのナノマシンも使ったから、3・8世代ってと

ころかな？」

キリト「ナノマシンっていうのは、なんなんですか？」

束「かたちやんのだつたら水をコンセプトにしてる。」

キリト「へえー。」

そしてさらに2ヶ月

イギリスの空港

キリト「じゃあ次は、IS学園で会おう！」

ハク「はい！」

ハク・セシル「じゃあ、さようなら！」

キリト・アスナ・イチカ・カタナ「「「またねー！」」

そして、4人は、一旦日本に帰つていった。

そして、また1ヶ月後

IS学園の入学式が行われようとしていた。

# I S 学園入学編

## 10 話

ここは、I S 学園1年1組

キリト・イチカ・ハク 「(流石にこれは、きつい。)」

この3人が言つた事は当たり前である。1人を除いて周りが全

部女なのだから。

ちなみに席は、1番前から

キリト アスナ

イチカ カタナ

ハク セシル

という順番なのだから。

ちなみに春秋は、

女の子 キリト アスナ

等

春秋

という感じだ

春秋「(チツ、ここでハーレム作ろうとしていたのになんて、男が他に3人もいるんだよ。)

途中から声に出てしまつていて、周りに少しひかれている。

山田先生「皆さん、入学おめでとうございます。わたしは、このクラスの副担任を務める山田真耶です。

1年間よろしくお願ひします

すね！」

「…………」「…………」「…………」「…………」

山田先生「えつ、えつと？」

クラスの誰も反応しない。

キリト・アスナ・イチカ・カタナ・ハク・セシル 「(「「「よろしくお願いします、先生。」」」」

山田先生「あ、ありがとうございます。では、自己紹介をお願いします。」

春秋「織斑 春秋です。特技は、剣道です。みんなよろしく！」ウイ  
ンク！

うはつなにあれ

まだ向こうの3人の方がカツ  
ンク！

コいい さつきハーレムとか言つてたしね  
ちよつとキモいわー

山田先生「じゃあ、次は、桐ヶ谷くんお願ひします。」

キリト「桐ヶ谷 和人です。趣味は、ALOと機械いじりです。訳

あつてみんなより1年年上です。

よろしくお願ひします。」

キヤーかわいい系のイケメンだ

年上もいい

なあー

アスナ「私は、結城 明日奈。趣味は、キリトくんと同じでALO  
とあと料理です。ちなみにわたしは、

みなさんより2つ歳上だけどよろしく  
ね。あ、あとキリトくんは、わたしの恋人なので。」

イチカ「はじめまして、天道 一夏です。趣味は、アスナさんと同  
じです。よろしくお願ひします。」

こつ、こつちは、男前なイケメンだ

かつ、カツコい  
い

カタナ「私は、更識 横無よ。いちようこの学園の生徒会長だから  
わからないことがあつたらなんでも聞いてね

かこみにイチカは、わたしの恋人だか

らね！」

桐ヶ谷くんに続いて天道くんまでー だ

いじょうぶ、まだ一人残っているから

ハク「えつと、はじめましてハク・オルコットです。一様オルコッ  
ト社の副社長をやっています。よろしくお願ひします。」

あの人オルコット社の副社長だつて。

育ちもいい

しかっこいい

セシル「はじめまして、セシリ亞・オルコットですわ。ハクさんの  
婚約者オルコット社の社長です。よろしくお願ひしますわ。」

ぜ、全員に恋人がいるなんて。

残りがあれってさいやく。

ザワザワザワザワ

織斑 千冬 「うるさいぞ馬鹿ども！ 諸君、私が織斑 千冬だ。私の言うことには、「はい」か、「YES」で答える！ わかつたら返事をしろ！」

わからなくとも返事をしろ！ いいな？」

「「きゃああああああああああ」」

クラスの女子たちが騒ぎまくる。モンドグロッソを 2連覇したのだから当然なのだろう。

織斑先生「まつたく、うちのクラスにはろくなのがいないな…。 静かにしろ！」

そして、自己紹介が続いていった。

休み時間

キリト「ああー、つかれたー。」

アスナ「ちょっとキリトくん、おじさんっぽいよ。」

キリト「んでー、あれがイチカのお姉さんとお兄さんか？」

イチカ「ええ、そうですよ。」

春秋「おい、ちょっといいか？」

イチカ「それよりさ、ALOのなんかいいイベントありました？」

ハク「うーん、とくにはなかつたとおもうよ。」

春秋「おい、無視するな！」

イチカ「うるさいな！ 今話したるだろ！」

春秋「ふーん、せつかく僕が友達になつてやろうとしているのに。」

キリト・イチカ「別にお前みたいなやつと友達になんてなりたくないよ。」

篝「貴様ら、せつかく春秋が友達になつてやろうとしているのにそ

の態度はなんだ！？」

春秋「別にいいよ篝。」

筈「し、しかし春秋。こいつらは。はあーわかつた。」

ハク「やつと嫌な奴がいなくなつたよ。」

キーンコーンカーンコーン

セシル「おかげでチャイムが鳴つてしましましたわね。続annisは次の休み時間にしましようか。」

キリト「ああ、そうだな。」

山田先生「さつそくですが、クラス代表を決めたいと思います。立候補でも推薦でも構いません。誰かする人はいませんか？」

「桐ヶ谷くんがいいと思います。」

「わたしも！」

「わたしは、天道くんがいいと思います。」

「わたしは、ハクさんがいいと思います。」

「でもわたしは、イギリスの代表候補生のセシリアさんがいいと思います。」

セシル「すいません。わたしとハクさんは、オルコット社の仕事があるためクラス代表は辞退させていただきますわ。」

山田先生「わかりました。じゃあ、桐ヶ谷くんと天道くんの投票できめましょうか？」

筈「待つてください。そこは、小学校の時に神童と呼ばれていた春秋がすべきです。」

春秋「筈のいうとうりだ。神童と呼ばれた僕の方が適任さ。それに、日本を裏切つてイギリスに行つた奴らにクラス代表務めさせて、この僕に1年間その屈辱を味わえというのか？」

？

山田先生「じゃあ、3人の投票できめましょうか？」

織斑先生「いや、ここは3人でクラス代表をかけて勝負してもらいましょう。まあ、2年間も寝たままゲームしてるやつらなので、

勝負が目に見えていると思う

が。」

ハク「お前らに俺たちのことを馬鹿にされたくはないよ。」

春秋「そうか、この僕に楯突くとはじやあ君も入つて4人でやると  
しようか。」

織斑先生「期間は、今週の金曜日にする。」

キーンコーンカーンコーン

織斑先生「じゃあ、解散。」

# 11話

あれから4日後、今日は、男子4人の決闘の日である。

イギリストで、3か月練習していたためこの4日は、調整期間のようになっていた。

キリト「今日は、いよいよ決闘の日だな！」

アスナ「キリトくん、ワクワクしてるでしょ？」

キリト「ああ、まあな！」

ハク「また、キリトさんの悪い癖でちやつてますね。」

アスナ「ほんとだよ！」

カタナ「まあまあ、いつものことじゃないの。」

ここは、第三アリーナ。

山田先生「まだ、織斑くんの専用機が届いていないため、桐ヶ谷くんと天道くんの試合から、はじめたいと思

います。」

キリト・イチカ「わかりました！」

キリト「こい、ブラックエンペラー！」

アスナ「頑張つてね、キリトくん。」

キリト「ああ、絶対に負けない。じやあ、行つてくる！」

アスナ「うん、いつてらっしゃい。」

黒の剣士、ここに君臨！

イチカ「こい、ホワイトエンペラー！」

カタナ「勝つてきてね！」

イチカ「おう！」

イチカ「いつてくる！」

カタナ「がんばつてね。」

火の虎、出陣！

イチカ「今日こそ勝たせてもらいますよ！」

キリト「どこからでもかかつてこい！」

カウントダウンが始まる。

キリトは、愛剣エリュシデータを抜く、対して、イチカも愛刀猛虎を抜く。

5：4：3：2：1：開始！

キリト「行くぞ！」

キリト・イチカ「武装色硬化」

その瞬間、剣と刀が黒に染まる

お互い、イグニションブースト（瞬間加速）を使い剣と刀がぶつかり合う。

キリト「はっ！」

イチカ「やつ！」

キリト「イチカ、ここからは、本気で行こうか！」

イチカ「そうつすね！」

キリトは、機体からもう1本の剣を取り出した。そう、ダークリパルサーである。

対して、イチカの刀から赤い火が出始める。

黒の二刀流と白の炎の戦いは、見ている人にとってもつと長く続いて欲しいとおもつた。

しかし、結末は、いきなり……

キリト「はあーーーー！」

イチカ「せやあーーーー！」

先に落ちたのは……ホワイトエンペラーだった。

審判「天道一夏ＳＥエンプレティー、よつて勝者桐ヶ谷和人！」

キリト「大丈夫かイチカ？」

イチカ「また負けちゃいました。さすがです、キリトさん！」

キリト「ああ、ありがとう。」

先にキリトがピットに戻つていく。

イチカ「くそッ、次は絶対に勝つ！」

春秋「あはは。いかにも負け犬らしい顔だよ。」

イチカ「ああ？」

春秋「はあー、さつさと負け犬は立ち去れって言つてんだよ！」

イチカ「べつにお前より強いし、俺にそんなこと言わないでもらえる？」

春秋「この僕が君より弱い？そんなことあるわけないだろ。さつさとあのライミーを潰して、次はお前達二人

だ！」

イチカ「まず、ハクにもお前は勝てないけどな。」

春秋「はつ、瞬殺してやる。」

そして、イチカはピットに戻つていった。

イチカ「絶対勝てよ、ハク。」

キリト「次は、ハクの番だな！絶対勝てよ！」

ハク「ええ、もちろんです。」

モニタールーム

山田先生「ほ、ほんとに彼らは、ゲームの中に2年間もいたんですよね？」

織斑先生は、なにも言えなかつた。

織斑先生（この情報は、ほんとにたしかなのか？）

ピット

セシル「油断しないように頑張つてください！」

ハク「ああ、もちろん！」

ハク「こい、パープルエンペラー！」

赤眼の死神、爆進！

アリーナ

春秋「はあー、やつときたかい？これだからライミーは…」

ハク「…」

春秋「まあ、仕方ないか？この僕が話しかけているのだから！」

ハク「…」

春秋「そこまで、僕と喋ることは、恐れ多いと思っているのか？まあ、最後に忠告しといてやるよ！ここで、

お前が土下座して謝れば、許してやつてもいいぞ？」

ハク「はあー、お前に普通に無視されているという感覚はないのか？」

春秋「ふん！どうやら謝罪はないようだな！」

ハク「あたりまえだ！」

山田先生「ただいまより、第2試合を始めます！二人とも準備はよろしいですか？」

春秋・ハク「はい！」

カウントダウンが始まる。

ハクは、愛剣 白龍を取り出す。春秋も雪片式型を取り出し、互いに構える。

5…4…3…2…1…開始！

春秋「見せてあげよう！神童と呼ばれた僕の力を！」

剣同しがうちあう

ハク「日本じゃおまえていどで神童と呼ばれるのか？」

春秋「あたりまえだ！僕は、君たち凡人とは違う！」

イグニションブースト（瞬間加速）を使い接近し、雪片式型を振りおろす。

しかし攻撃がどこから來るのかわかつていたと言わんばかりに余裕でかわす。

ハク「神童さんもその程度かい？」

春秋「だまれ！マグレが何回つづくかな？」

再び攻撃して来るがそれも余裕を持ってかわされる。

春秋「ツ！なぜあたらんんだ！」

ハク「僕には未来が見えるから。」

春秋「そんなわけあるかー！」

叫びながら攻撃するがまた、ひらりとかわす。

ハク「さて、そろそろ終わりにするかな。武装色硬化！」

剣が霸氣をまとい黒くなる。

春秋「くそツ！零落白夜！」

それを武装色で硬化した剣でうけとめる。

春秋「なつなぜ？」

## ミニターム

山田先生「おつ、織斑先生！春秋くんの零落白夜は、絶対防御も突破できただんじやなかつたんですか？」

織斑先生「ああ、もともと私が使つてなた雪片の後継機だからな！だから、ありえない！」

## アリーナ

ハク「さて、そろそろファイナーレと行こうか！」

春秋「くそ、くそもう一度だ！零落白夜！」

ハク「……………」

お互いの剣が交わる。

春秋「うはっ！」

白式は、落ちていった。

ト。  
審判「織斑 春秋S/Eエンプティー。よつて、勝者、ハク・オルコット。」

春秋「くそツ！この僕が、凡人に負けるなんて！」

ハク「そこまで強くは、なかつたな。」ボソッ

審判「第三試合目は、織斑 春秋くんと桐ヶ谷 和人くんです。それでは、30分の休憩に入ります。」

ピット

キリト「やつたな！」

ハク「ああ、だがあまり相手にならなかつた。」

アスナ「だからって、油断しちゃダメだよ！」

キリト「ああ、わかつてる！」

ハク「そういえば、イチカとカタナは？」

アスナ「キリトくんと春秋くんの試合は、キリトくんが圧倒的な力で勝つし、ALOに先に行つてるつて。」

ハク「あははは。」

キリト「セシルは、学校終わつた後からダイブしてゐんだつたつけ？」

ハク「はい。なんかリーファと約束があるとかいつてましたから。」

審判「準備が整つたため2人は、ピットから出てきてください！」

キリト「じゃあ、行つてくる！」

アスナ・ハク「いつてらつしゃい！」

キリト「こい、ブラックエンペラー！」

黒の剣士、参上！

# 13話

アリーナ

春秋「ようやくきたかい？」

キリト「さっさとはじめようよ。」

春秋「ハハツ、たまたまゆだんしてしまつてあのライミーに負けたけど次はないな。」

キリト「もうかつたきかよ？」

春秋「当たり前だ！天道一夏？だつたか？そんな奴に勝つたからつてちようしのつてんじやねえぞ！」

キリト「おまえも、ハクに負けただろ？」ボソ

春秋「あつ？なんかいったか？」

キリト……………」

春秋「ハハツ、おまえもあのライミーのように無視かよ？そうやつておまえらみたいな凡人がこの神に愛されて

ている僕に楯突くのが一番嫌いなんだよ！」

審判「ただ今より、第3試合を始めます。2人とも準備はいいですか？」

キリト・春秋「はい！」

カウントダウンが始まる。

キリト「さつさと終わらせたいから全力で行くか。」

キリトは、エリュシデータとダークリパルサーを抜き、二刀流の構えをとる。

春秋「ふん！凡人がこの神童の僕にどのくらいついていけるかな！」

春秋も、雪片式型を取り出し、構える。

5…4…3…2…1…開始！

キリト「はあー！」

春秋「やあああ！」

春秋は、イグニションブースト（瞬間加速）をして、雪片式型を振りおろす。

しかし、キリトはエリュシデータとダークリパルサーをクロスにして、受け止める。

春秋「チツ!!」

春秋「はあー！」

雪片式型で、春秋はまた切り込む。しかし、キリトは、ハクがやつていたようにどこから来るのかわかつて、いたようになかわす。

春秋「くそッ！なぜあのライミーのようにあたらないんだ？」  
怒りをぶつけるように斬り込む。そのせいか、剣も少し速さをますがそれさえも、キリトは余裕と言わんばかりに平然とかわす。

春秋「くそッ、くそッ、くそッ！」

キリト「そろそろファイナーレと行こうか！」

春秋「まだまだ！」

キリト「武装色硬化！」

春秋「死ねー、零落白夜ーー！」

しかし、ハクと同様に武装色で硬化したエリュシデータとダークリパルサーによつて、受け止められる。

キリト「たしかにその零落白夜の絶対防御を突破する力は、脅威だろう。

しかし、この武装色の霸氣には、通り抜けてたまるか！僕は、あの千冬姉の弟で、神童なんだ！おまえみたいな凡人に負けるはずないだろう。」

キリト「そうか、じゃあ落ちろ！」

春秋「そう簡単に落ちるかよ！ヒツ！」

キリトの目つきは、さつきのとは、まるで違つていた。姿全てからとてつもない殺氣を放つていた。

キリト「さあ、そのおまえの腐つた想いを絶ち斬つてやるよ！」

春秋「くそがー、零落白夜ーー！」

まるで、イノシシのように猪突猛進で突つ込んでくるが、かわしながらそのふところにカウンターを入れる。

そして、白式が落ちる。

審判「織斑 春秋SEエンプレイー、よつて勝者桐ヶ谷和人！」  
ピット

アスナ「おかえり、キリトくん。」

キリト「ただいま！」

ハク「試合、ずいぶん長かつたですね？」

キリト「向こうが、こつちをいちいち見下してくるから無視してた  
けど次は、それに怒つてくるしな。

ほんとにめんどくさい奴だよ。」

ハク「あつははは。」

アスナ「じゃあ、戻ろつか！」

キリト「なんか、めぼしいクエストあつたか？」

アスナ「うん、面白そうなのあつたよ！ 何人か呼んだから。」

キリト「誰を呼んだんだ？」

アスナ「ふふつ。ひ・み・つ。」

キリト「なんだよそれ。」

ハク「なんだか、カタナさんに最近似てきてません？」

アスナ「ハクくん！」

ハク「すいませんでした。」

キリト「帰つたら、アルン集合な？」

アスナ「わかつた！」

ハク「俺は、あと少し残つてる仕事があるからそれが終わつたら行  
くよ。」

キリト「どのくらいかかるんだ？」

ハク「4・50分で終わると思います。」

キリト「了解！」

アスナ「ハクくん、また後で！」

ハク「はい。」

モニタールーム

織斑先生「なんなんだあのISは？あのISは、春秋が持つてこそ

の機体だ！」

廊下

筈「春秋が負けた？いや、神童と呼ばれたあいつが負けるはずがない！そりゃあいつらは、なにかしたんだ！」

そうだ、じゃないと春秋が負けるはずない！」